

スティックなダンディー：城さんの思い出

塩 川 徹 也 Tetsuya SHIOKAWA

吉田城さんと最初にどこで会ったのか、どうしても思い出せない。城さん——と、あえてなれなれしく呼ばせていただくが——とわたしは五歳違いで、後になって知ったところでは、同じ高校の出身である。育った地域も、城さんは東京生れで東京育ち、わたしは親の転勤に伴って各地を転々としたが、それでもご実家の千駄ヶ谷は、わたしが小学校の最初の三年間および中学校三年からフランス留学に至る十年を過ごした原宿のすぐお隣である。さらに吉田家は甲州のご出身と伺っているが、わたしの母方も甲州の産であり、伯母一家は千駄ヶ谷に住んでいた。戦前に東京に出てきた甲州人は、中央線沿線の中野、千駄ヶ谷等に住むことが少なくなかったという。後年、親しくお付き合いをはじめ、話の端々からこのような共通点に気が付き、いよいよ親近感を深めることになった。

しかし学生時代の城さんとは、これまた重なり合うところは少なくなかったのに、結局直接お目にかかることはなかった。わたしは大学紛争の余燼のさめやらぬ1970年にフランスに留学し、丸五年間、高等師範学校（ENS）とパリ第四大学で学んだが、城さんは1975年、わたしと入れ替わるように同じところに留学した。高等師範学校の日本人寄宿生には、わたしの次の年からブルースチアンが続いたので、寮の食事を共にしながらいぶん耳学問をさせてもらったが、その折に、吉川一義さんや岩崎浩さんの口から、すこぶるつきの俊才の代表としてしばしば吉田城の名前が飛び出した。こうして城さんの勇名がわたしの胸に刻み込まれた。

浦島太郎状態で帰国し、思いがけず京大に拾われて、1976年4月から教養部でフランス語を教えることになったが、ここでも吉田さんの名前は鳴り響いていた。もちろん学部の四年間を京大で過ごされたからである。東京っ子の城さんが京大に入学したのは、受験の年に紛争のせいで東大入試が中止されたことと無関係ではあるまい。これは、京大にとって幸運であったが、城さんにとっても幸運であったに違いない。学生そしてやがては教師として理想の環境に会ったばかりでなく、生涯の伴侶となる典子さんにめぐり会ったのだから。城さんは、留学後わずか三年で記念碑的な博士論文を仕上げ、それを携えて帰国し、直ちに阪大に就職した。こうして城さんとわたしは、同じ関西圏に住むことになり、この頃初顔合わせがあったはずなのだが、それをどうしても思い出

せない。あまりに自然で何げない出会いだったのだろう。それに、関西でずっとお付き合いするつもりだった。ところが、これも思いがけない成り行きで、1980年春に東大文学部に転出することになった。妻に就職が決まり、マンションを購入したばかりだったので、当初は単身赴任であったが、二年後に妻も東京に移ることになった。吉田さんはその時、お宅に私ども夫婦を招いてくださり、典子夫人ともども別れを惜しんでくださった。城さんの比類ないホスピタリティーに接した、最初の機会だった。

しかし本当に親密な交際が始まったのは、1984年から翌年にかけて、二人がパリに長期滞在をした頃からである。吉田さんは、国立東洋言語文化研究所（INALCO）の客員教授として日本語を教えながら、『失われた時を求めて』の新プレイヤード版の校訂に打ち込んでいた。二人とも、リシュリユー街の旧国立図書館かユルム街の高等師範学校で仕事することが多かったのも、しばしば昼食を共にしては、話に花を咲かせた。城さんは話し好きで、わたしは大体聞き役に回っていたが、それが気持ちよかった。それは、城さんがサービス精神旺盛で、しかも自分を戯画化することが上手だったからだろう。INALCOの授業の最中、名詞の性（genre）を間違えたことを学生から指摘され、うっかり「ばくは性（sexe）に弱いので」と口走って教室を爆笑させたという失敗談を披露してくれたことがあるが、わたしも大笑いしながら、城さんのことだから、わざと間違えたかもしれないという思いが頭の隅を掠めていた。城さんのホスピタリティーは、パリでより磨きがかかったのではないだろうか。ある冬の晩、小説家の辻邦生氏、そしてわれわれの恩師フランソワーズ・ブロック＝サカイ先生の愛娘セシルさんとアンヌさんと共にお宅に招待されて、見事な手料理をご馳走になったことは忘れがたい。辻さんもよほど印象が強かったのだろう。「その晩のことはよく聞かされました」と、ずいぶん後になって、佐保子夫人から伺った。

人生の絶頂にあった城さんを病魔が襲ったのは、このパリ滞在中である。頑健で我慢強い城さんが、時折疲れたという言葉を出すようになり、顔もむくんできたことには気がついてしたが、人の何倍も働いているのだから過労だろうと思っていた。ご本人も整体をはじめとしていろいろな民間療法を試していたが、なかなか医者にはかかろうとしなかった。入院前後の事情は覚えていない。それ以前に、何でも自分で方をつけて、人に迷惑をかけることを潔しとしない城さんは、少なくともわたしには何も言わずに入院してしまった。日本でも、母上は城さんの居所がわからずに大変心配されたようで、わたしの妻のところまで問合せのお電話があったりした。やっと大学都市の病院に入院し

ていることが分かって、お見舞いに出かけたのは、何日か経ってからではなかったか。鵜飼哲さんと一緒だったと思う。城さんはベッドで半身をを起こして、本を読んでいた。腎不全と診断されたこと、これから一生、透析をしなければならないことを、当たり前のように説明してくれた。そして、わたしがありきたりのお見舞いの言葉をつぶやくと、こんな答えが返ってきた。「親父は、手術をすることになったときも、その直前まで原稿のゲラに朱を入れていた。ほくも見習いたい。」父上は、英文学者として令名の高かった吉田正俊先生である。城さんの文学に対する愛情と勤勉さが親譲りであり、しかもそのことを城さんが深い感謝の気持ちで受け入れていることが、真直ぐに伝わる言葉だった。それから少しして、「でも悔しい」という言葉が洩れ、城さんは涙を流した。後にも先にも、城さんが弱音を吐くのを聞いたのは、この時しかない。

その後の城さんの、鬼神をも拉ぐ活躍を語るのはわたしの任ではない。わたしにとって城さんは、何よりも、絶対の信頼を置ける対話者であり友だった。京大のお世話になり、文学部でも教えさせていただいた関係で、京大仏文には恩義と親しみを感じつづけていたが、吉田さんがもしもおられなかったなら、京大仏文と東大仏文がこれほど緊密な協力関係を築くことはできなかっただろう。1990年代以降、フランスをはじめとして、外国からの研究者の来日は飛躍的に増大した。また、フランスの文学・思想・文化をテーマとし、フランス語を使用言語とする国際シンポジウムを日本で開催することも当たり前になった。このような仏文の国際化に、吉田さんが中心的な役割を果たされたことは言うまでもない。このような状況で、京大に招聘された研究者が、東京で講演することを望む場合、東大でお引き受けすることが少なくなかったし、逆に東大でお呼びした研究者のうち何人もが京大のお世話になった。こうして吉田さんとわれわれ東大仏文の間に連帯意識が培われていった。一つだけ例を挙げれば、2003年秋、アカデミー・フランセーズのマルク・フュマロリ教授が日本学術振興会著名学者招聘事業の枠で一月間滞日されたが、吉田さんは、その受入責任者として準備段階から帰国当日に至るまで、諸事万端に心を砕かれた。教授は東京にも一週間滞在了れたので、わたしもいろいろ相談に与ったのだが、気難しい世界的碩学の面倒な注文に、いやな顔も見せず迎合もせず、一つ一つ誠実に対応されるのには、頭が下がった。

吉田さんの力を借りたことを数えはじめれば、切りがない。国際フランス研究協会（AIEF）が、第52回年次大会（2000年7月）の共通論題の一つに「日本におけるフランス文学研究」を取り上げることを決めたとき、発表者の一人

として、すぐに城さんのことが頭に浮かんだ。体調のことを考えないわけではなかったが、無理をお願いすると、すぐに承諾の返事が戻ってきた。そしてわざわざパリに出向いて、プルースト研究に対する「日本学派」の貢献を鮮やかに紹介して会場を沸かせた。しかしそれに劣らずお世話になったのは、『フランス文学史雑誌』（RHLF）の「書誌」への協力であった。六、七年前に、吉田さんとわたしはそれぞれ、中川久定先生と阿部良雄先生の跡を継いで、フランス文学史学会の通信会員になったが、その折に副会長のクロード・ピショワ教授から、日本で発表される書籍・雑誌論文の書誌を毎年作成するようにとの強い要請があった。個人の手に負える仕事ではないのでずいぶん迷ったが、せめて書籍とフランス語で発表された雑誌論文だけでもまとめることにして、吉田さんが西日本、わたしが東日本と中部地方を分担して、大学院生等の助けを借りて、書誌を作成することになった。1999年度から始めて、2004年度まで続けた。折角作成したものを送っても、毎年一回刊行される『書誌』には、その成果が必ずしも反映されているようには見えないので、だんだんやる気が失せてきたが、それでも、年末年始になるとどちらからともなく、次回のことを言い出すのだった。2004年度分については、こちらがぐずぐずしていたら、2005年2月1日にメールが送られてきた。「すっかりご無沙汰しております。ピショワの追悼号が送られてきてふと思い出したのですが、また2004年度の日本における仏文関連欧文書誌を送る必要がありますね」という文面を見て、城さんの几帳面さと義理堅さに感心すると同時に、これなら体調もまずまずなのだろうと思った。ところが、それから何回かやり取りをして、一応完成した書誌を送ったところ、「数日前京大病院に入院し、週末の今だけ帰宅している状況」という返事が返ってきた（2月26日）。さらに同日、追って書きが送られてきて、もう少し詳しい状況の説明があった。併発したC型肝炎を押さえるためにPEGインターフェロンを受けることを決めた、そのための入院だから心配ご無用という心遣いの言葉に続いて、こう記されていた。「副作用がひどいことも考えられるので（発熱、脱毛など）、今から楽しみです（反語）。」城さんの一見陽気なダンディズムの底に潜むストイックな覚悟に、と胸を突かれた。

城さんの訃報は、京都からも東京からもフランスからも入ってきた。ご葬儀に駆けつけたかったが、少し前に母を亡くしたばかりで、身動きができなかった。それに一週間後にはパリに出かけて、国際フランス研究協会の年次大会で会長挨拶をしなければならなかった。挨拶のかなりの部分は、前年度に亡くなった会員の追悼の言葉にあてられる。なんともいえない気持ちで、城さんの訃報を何行か原稿に書き加え、出発した。到着した翌日、ルモンド紙を買い求め

て開いてみたら、フランシス・マルマンドの手になる追悼文が目飛び込んできた。城さんが、フランスの研究者、知識人にどれほど敬愛されていたかが、ひしひしと伝わる文章だった。大会の会場では、アントワヌ・コンパニオンをはじめとして、何人もの参会者からお悔みを言われた。会場は、城さんも留学時代、講演会や映画鑑賞で何度も出入りしたに違いない高等師範学校のデュサヌ講堂、そして五年前の大会では、城さん自身講壇に立った場所だ。会場にいるはずのない城さんの姿を追い求めながら、わたしは拙い原稿を読み進めていった。

(しおかわ・てつや 東京大学大学院教授)